

# 護法ファム・コン・タック小史試訳

—— カオダイ教聖典の考察 (1) ——

高 津 茂

## 序

カオダイ教 (Đạo Cao Đài) は、ヴェトナムのフウ・クオック (Phú Quốc) 島において、1920年交趾支那政庁下級官吏であったゴ・ヴァン・チウ<sup>(1)</sup> (Ngô-văn-Chiêu, 呉文昭) (1878—1932) が啓示を得て始められ、1926年にレジョン・ド・ヌール勲章を授領したレ・ヴァン・チュン (Lê văn Trung, 黎文忠) (1875—1934) を初代教主として正式に教団として発足した新興宗教<sup>(2)</sup>である。同教の教義は儒・仏・道・キリスト教・民間信仰を混淆したものであり、主神は至上なるカオダイである。同教の総本山はタイ・ニン (Tây Ninh) 郊外に位置し、第二代教主ファム・コン・タック (Phạm-Công-Tắc, 范公則) (1893—1958) の時に教団は拡大する。1930年代末から1940年代末にかけてそれ以前からの反仏・親日色を鮮明にし、ヴェトナム独立後はバオ・ダイ (Bảo Đại, 保大) 帝 (1926—45) の政府を支持した。1956年にはゴ・ディン・ズィエム (Ngô Đình Diệm, 吳廷琰) (1901—63) によって、1945年に創設されたカオダイ軍が解体され、政治色を弱めた。同教徒の総数は150万人とも200万人<sup>(3)</sup>とも言われた (1970年代初め) が、解放後は約50万人<sup>(4)</sup>とされている。

カオダイ教の主な研究は、同教の政治的性格からか、ヴェトナムにおける民族解放闘争との関係でなされる場合が多い。ウェルナー・ジェーン・スーザンの社会政治史を中心とした精緻な研究<sup>(5)</sup>や、ヴィクター・L・オリヴァーの宗教社会学史を中心とした考察<sup>(6)</sup>さらには R. B. スミスの簡潔な小論<sup>(7)</sup>が近年の代表的研究

と言って良いであろう。また、日本においても大岩誠の概説<sup>(8)</sup>がある。しかし、それ以前のフランス人の手になる研究を含めて、まともに教義を、それも聖典を研究対象としたものはヴェトナムでのわずかの研究<sup>(9)</sup>を除いてなかった。カオダイ教自体が創設後しばしば分裂を重ねていた<sup>(10)</sup>ために、教義の統一ができにくかった背景は理解されるものの、同教を理解する上で、同教の聖典<sup>(11)</sup>の内容を知っておくことは必須かと思われる。よって、本小稿に於いては、カオダイ教の聖典に焦点を当てて、考察を加えるものとする。ただ、カオダイ教の聖典とは、次の如き内容を含んでおり、それぞれの小冊子をまとめたものをもって、聖典としている。筆者は1971年と1973年に、同教総本山タイニン省のトア・タイン・タイ・ニン (Tòa Thánh Tây Ninh) を訪ね、各々の聖典を入手している。まず1973年入手した聖典によると

[1973年入手の聖典の内容]

1. 『護法ファム・コン・タック小史 (Tiểu sử Đức Hộ-Pháp PHẠM-CÔNG-TẮC)』, pp. 36
2. 『新律 (TÂN-LUẬT)』, pp. 17, 1966 再版
3. 『法正伝注解 (PHÁP-CHÁNH TRUYỀN CHÚ GIẢI)』, pp. 75
4. 『聖言協選 (THÁNH-NGÔN HIỆP-TUY-ỀN)』, 第一巻 pp. 139, 1969 再版
5. 『聖言協選』第二巻 (含詩文・詩文教道) pp. 144, 1970 三版
6. 『李教宗<sup>(12)</sup>の八道議定 (BÁT ĐẠO-NGHỊ-ĐỊNH của Đức Lý-Giao-Tông)』, pp. 10

7. 『道律 (Đạo-Luật)』, pp. 40, 1969 再版
8. グェン・チュン・ハウ (Nguyễn-Trung-Hậu) 編『論道問答 (Luận Đạo Văn Đáp)』, pp. 24, 1972 再版
9. グェン・ヴァン・キン (Nguyễn-văn-kinh) 『会理闡真論 (Hội-Lý Xiển-Chơn Luận)』, pp. 68, 1969 再版
10. ファム・コン・タック『大道修法 (Phường-Tu Đại-Đạo)』, 第一巻, pp. 32, 1969 再版
11. ファム・コン・タック『大道修法』, 第二巻, pp. 32, 1969 再版
12. グェン・ヴァン・キン『講道要言 (Giảng-Đạo Yếu-Ngôn)』, pp. 32, 1970 再版
13. レ・ヴァン・チュン (Lê-văn-Trung) 編『行道方針 (Phường-Châm Hành-Đạo)』, pp. 20, 1970 再版

となっている。それに比し、1971年に入手した聖典では、次のような内容となっている。

[1971年入手の聖典の内容]

1. 『護法ファム・コン・タック小史』
2. 『新律』
3. 『法正伝注解』
4. 『李教宗の八道議定』
5. 『道律』
6. 『幸道 (Hạnh-Đường)』男女理事委員会職務訓練用資料 (Tài Liệu Huân-Luyện Chức-Việc Ban Trị sự Nam Nữ) pp. 36 1970 版
7. 『聖言協選』第一巻
8. 『聖言協選』第二巻 (含詩文・詩文教道)
9. フィン・ヴァン・デン (Huỳnh-văn-Đền) 編『文詩協選 (Văn-Thi Hiệp-Tuyển)』第二巻 pp. 95 1969 版
10. ファム・コン・タック『大道修法』第一巻
11. ファム・コン・タック『大道修法』第二巻
12. グェン・ヴァン・キン『会理闡真論』
13. レ・ヴァン・チュン編『行道方針』
14. グェン・ヴァン・キン『講道要言』

以上のように1971年入手の聖典と1973年入手

の聖典には、その内容において異同がある。すなわち、1971年入手の聖典には『幸道』、『文詩協選』第二巻の二冊が入っているが、1973年入手の聖典にはそれがなく、かわりにか、グェン・チュン・ハウ『論道問答』が入っている。1971年・1973年の両入手聖典に共通するのは12冊である。この異同は、1970年代初頭において教義の大綱は確定したものの、やはり一部に未定の評価があり、教義研究の進展に伴い改められたものと推察されよう。

さて、本小稿の主眼とするのは、もっぱら1971年・1973年入手の両聖典に共通する中の一つである『護法ファム・コン・タック小史』の翻訳・紹介にある。カオダイ教聖典の研究に当って、まずカオダイ教徒達がどのように考えていたかを知るには、その教典の内容が史実と違っていたにせよ、聖典そのものの内容を知ることが肝要かと思われる。それゆえ、本小稿では、ファム・コン・タックという第二代目の教主の史伝よりもむしろ、カオダイ教徒達のファム・コン・タック像を理解することに留意した事を前もっておことわりしておきたい。

護法ファム・コン・タック小史

目次 始めに

I. 少年時代

- (1) 天に関する一夜
- (2) 早い時期からの革命精神の萌生え

II. 壮年期

III. 悟道時代

- (1) カオダイ教の創立
- (2) 天封護法 (Thiên-Phong Hộ-Pháp)

IV. 伝道過程での諸障碍

V. 功業

- (1) 聖廟建立事業
- (2) 聖会 (Hội-Thánh) と人生会 (Hội Nhân-sanh) の組織事業
  - i. 九重台 (Cửu-Trùng Đài)
  - ii. 協天台 (Hiệp-Thiên-Đài)
  - iii. 福善機関 (Cơ-Quan Phước-Thiện)
- (3) 教えの四方各処への発展

- (4) カオダイ軍 (Quân Đội Cao Đài) 組織  
 VI. 各信徒の、またヴェトナム人民の瞻仰の心  
 VII. 教えの道についての護法ファム・コンタックの小史  
 (1) 護法の流亡の歩み

## 始めに

カオダイ教は現在あるすべての教えを融合した教えである。

名誉教宗李太白 (Lý Thái Bạch) は1927年1月13日夜半にカオダイ教について、次の如く講じた筆を降した。

「現在、人類はまさに重大な危機の時代を迎えている。かつての秩序と大平はすでになく、倫理は地に堕ち、人心は墮落している。疑り深き者に対しては、上帝 (Thượng-Đê) の聖旨も虚しい。彼らは知らないのだ、全宇宙と人類の命運の全てを主宰する至尊の人物があのカオダイの上におわしますを。

その昔、各民族は、互いに遠くに移動する手段を欠いていたので、お互いに知りあうまでには至らなかった。至尊 (Đức Chí Tôn) は、互いに違った時期、違った地方に、大道 (Đại-Đạo) の五枝を創りたもうた：

1. 人道<sup>①</sup> (Nhân-Đạo) [孔子 (Khổng-Tử)]
2. 神道 (Thần-Đạo) [姜太公 (Khương-Thái-Công)]
3. 聖道 (Thánh-Đạo) [イエス (Giê Su)]
4. 仙道 (Tiên-Đạo) [老子 (Lão Tử)]
5. 仏道 (Phật-Đạo) [釈迦牟尼 (Thích-Ca-Mâu-Ni)]

それぞれの枝は、発源地に特有な風俗を基礎として創設された。

今日、五大洲の間の交通は便利となった人類は相互に一層知りあうようになり、真正な太平の世を切実に希求している。しかるに、各教派の現状のために、人々は互に和合して生活することができないでいる。それゆえ、至尊 (Đức Chí-Ton) は、五枝のすべてを一つに合わせて、唯一のカオダイの大道 (Đại Đạo

Cao-Đài) に帰せしむことを決定されたのである。」

カオダイ教 (Đạo Cao Đài) は、あらゆる信仰と協調することを目的とするばかりでなく、ありとあらゆる精神の進展の程度のすべてに適合することを目的としている。

I. 倫理の方面について、カオダイ教は、人々が自分自身に対し、家庭に対し、社会に対し、人類に対して責任を負っていることを教諭している。

II. 哲理の方面について、カオダイ教は、心神の安寧を探求するために、人々が奢侈や名声や利得を蔑視し、物質的な悪から脱離することを奨励している。

III. 祭祀の方面について、カオダイ教は、至尊や人類に共通の父なる人 (Đấng Cha chung của loài người) や祖先に共通の神霊 (Đấng Thần-Linh cùng Tò-tiên) を奉祀するよう奨励している。しかし、塩を祭品として奉上したり冥器を焚すことは禁じている。

IV. 神学の方面について、カオダイ教は靈魂 (linh-hồn) を認めている他のそれぞれの教えと考えを同じにしている。すなわち、靈魂は身体が死んでしまった後も存在し、輪廻 (luan-hồi) の法則に従って断えることなく投胎がくりかえされ、進展すると考えられている。

V. 布教の方面について、カオダイ教は、各信徒が、精神の発展過程に従って、真の幸福をさらに享受することができるために、まさに神秘的な教えを論ず話を彼ら信徒に伝えている。

カオダイ教は、至尊の教えであり、真の価値を有する崇高で神妙なる唯一の教えである。

現在、大いなる教え (Đại Đạo) を守護し、発展させるために、世に在って至尊を代表している人物は、ヒエップ・ティエン・ダイ (Hiệp-thiên-đài, 協天台)<sup>②</sup>とクゥ・チュン・ダイ (Cửu-trùng-đài, 九重台)<sup>③</sup>のすべてを管掌している護法ファム・コン・タック師である。

我々は、カオダイ教を深く広く理解するためにも、教えや人生の師であり、同じように民族の

師でもあった護法の明らかな功績と、護法の小史をすべからく知らねばならない。

## I 少年時代

カオダイ教の護法にして教主 (Giáo-Chủ), 二つの有形台 (Hữu-Hình Đài)<sup>㉑</sup>を掌管しているのは、南越のタン・アン (Tân-An) 省ビン・ロク (Bình-Lộc) に在ったファム (Phạm) 家の家庭で幼年時代をすごしたファム・コン・タックである。生父は仕事のためにビン・ロクに移って来ており、そのためにこの地で師は生まれ出たのである。師の正しい原籍は、タイニン (Tay-Ninh) 省チャン・パァン (Trảng Bàng) 郡アン・ホア (An-Hòa) 村にある。師が庚寅の年(1890)のまきに5月5日に生まれた<sup>㉒</sup>ことは、特別のことである。というのは、屈原が汨羅の江に身を投じた日が5月5日であり、また、劉辰・阮趙が天台に昇った日がやはりこの日であるからである。端午の節句に当って生まれたために、家庭では誰しものが、師は育ち難いのではないかと心配した<sup>㉓</sup>。実際には、師は紅顔で元気であり、特に衆にぬきんでる天資を持っていたが、時として、靈魂が何所かに隠れ迷い、死人のように昏睡してしまうことが自然とあって、一家をして、とりわけ老婆をしてしばしば憂慮させたりもした。

師は死んで、また何度も生きかえった。たびたび治療のための薬が求められたが、どのような病もこの疾病に関っていた。師は依然として、時に人事不省に落ち入り、また醒めそれが3時間の時も、また半日に及ぶ時もあった。17歳の年になるまでやむことがなかったが、この年師はこれまでのどの時より長い最後の人事不省に落ち入った。昏睡から醒めた時、師は靈魂の遊び歩いていた時のことをすべて記憶しているばかりか、逐一印象も覚えており、また細い点も克明に覚えていた。それらすべては、この後の師の修行生活と符合していた。

### (1) 天に関する一夜

それは丁未の年(1907)1月のことであった。ドン・ズゥ運動へ参加して逮捕されそこなった

後、師は家郷にもどって暫くの間回避していた。望日の月の明るい夜であった。師は、正に家の軒先に置かれた、妹の売り物のベッドの上に横たわった。月光は朧で、心魂が広く漂っているように思われた。師は突然長年の交りを結んだ友が師に聴かせるために吟詠した『神童問月』(Thần-Đồng Văn Nguyệt) という詩を思い出した。師はたった一度しか聴いたことがなかったのに、はるか昔の前世から師の心深くに刻まれていた詩のように大概を熟誦していた。師は横たわったまま、月を見て気を晴らすようにして、吟詠した。

秋天の夜、光青くして雲静かなり、  
旅路の宿にて、夜ふけるまで目覚めいる。  
耳は聴く、四面八方の響きを、  
月明煌々として、桂蘭に凭る。  
月を看見すれば、善心が動きは増え  
正に幾許かの言詞もて問月の詞句を吟ぜん。  
幾許かの言詞もて、事の始終を月の姨母に訊ねん、  
いかな縁故にて閑舒し得るや。  
月曰く、物換わり星移る、  
この身をして天は人げのために普く照らせしむ。  
英雄をして疲憊せしむ、  
千秋は霜雪として、一心は青き光たり。  
月の姨母に訊ぬ、上り到る道の在りやと、  
月亮の地 大約幾十遠きとこなるや。  
月曰く、汝の知らざらんや、  
一株の桂あらば、それ姨母が家なり。  
英雄、家に来たりて見んと試みん、  
彼の玉兔は、水晶が簾をさげる。  
月の姨母に訊ぬ、星がありやと。  
およそ春秋は幾度譲りしや、  
月曰く、柳弱く桃幼し、  
上るほどに光明は増し、高くなるほどに円さを増す。  
明らかにしてさやかなる姮娥は、一点の欠もなし、  
いかほどが星斗、汝が子女なり。  
月また君子に訊ねん。



雷雲の時、誰か経綸を保たん、  
 君子曰く、聖君ありと。  
 手を以って戦乱を安んずるは、  
 身を以って治平を成さん。  
 月、君子に訊ぬ、悲しからんや  
 哀しからんや、  
 君子月に訊ぬ、なげかわしきや、  
 いたましきや。

風前を經し柳は飄々たり。  
 香味は広潤にして、詩房は馥郁たり。

詩を吟詠する師の声は朗々と鳴り響き、波が発生したように青々と脈打って、深い月の光をも揺り動かした。師の心魂は、高く張りのある詩を吟ずる際の抑揚ある声と同じで、まさに晴空を高く飛ぶ翼のように軽やかにして寛やかでもあった。師の心は、限りなくのどかで穏やかな感覚に充ち溢れ、際限なくぼんやりとして柔らかく、静かで心安らかな感じで快かった。師は、この静けさを十分に味わいつくすために、またこの奇妙な感覚の根源を分析するために、魂の消えいらんほどに眼を閉じた。

そして、眼を開いた時、師は一種の弱々しい光芒が充ち満ちているような感覚に到った。その光芒は、太陽の灼熱の光芒ですらなく、また地球上を照らす月の静やかな光芒ですらなかった。光芒は、一点の曇もなく、穏やかに周囲を遍く混ぜ合せて一つとしていた。師ははるか地平線のかなたまでまっすぐにのびた俗世の塵一つだにない清潔で、平らな、雪のように白い道をよろよろと歩いた。師は歩みながらも『神童問月』の詩を吟じ続けていた。突然遠くの方がうす暗くなり、一つの人影がまた去っていった。師は声一つたてずに静かに注意して見た。人影もしだいしだいにはっきりと見えるようになってきた。師と数十メートル離れて、黄色い袈裟を着た、限りなく慈悲深い容貌の一人の老僧が現われた。師を見ると茫然とした表情で、老僧は声を上げた。

「おまえは「過去」を覚えているか。」  
 師は再び僧を見、たちまち思い出して、あわてて応えた。

「はい。」

確かにいまから10年以上前にこの僧に一度合っていた。師が10歳になった時、漢文を老学究について学んだ。師はいつも先生の近くに從い薬を調剤した。ある日、先生は師を、タイニンの十字路の市場にあるドック・ヴォン (Đức Vọng, 特望) 客店に秤り売りの薬を買いに遣した。店の中に歩み入った時、師は、帳場に対面した形で長椅子に座って、次のような情景を見た。そこには、誰からも敬愛されるような、本当に見るからに非凡な骨相をした、あごひげと髪がまっ白な老人とともに帳場の台の上で黄色い袈裟をきた老僧がいたのである。

師が秤り売りの薬を包み、店主が銭勘定をし終ると、店主は長椅子の方を指さして、二人の老客と坐って遊んでいかないかと師をさそった。

「ええでは。でも、おじさんおかまいなく。」

師は帳場に入って立ちどまり、老僧と老人を詳細に見た。二人は師を指し、互いに話を始めた。師は耳を傾けて聴いて、二人が正に師の相について論じていることが解り、また師の相命について話していることが解った。文字通り師が見聞きしたことと、老僧の結論のことば『この少年は極めて非凡な等級に入り、こやつ<sup>この</sup>の事業は限りなく高まるだろう』は、記憶の中に永遠に刻まれた。

古いことを思い出して、師は老僧に、過去や現在、さらには未来についても尋ねてみようかと思った。師はいったいどのように尋ねたらよいかとことばをさがしあぐねていると、老僧はその意思を知っているかのように、師の手をとって微笑<sup>ほほえ</sup>んだ。

「おまえは、いま何を考えているんだい。」

過去と遊んでばかりいるのはやめなさい。」

師は一言「はい」と答えて、機械のように老僧に從って歩み入った。老僧は、師が入り易く、また談じ易いように、同じ所に座るよう望んだ。白く柔らかで温い光芒の下、極めて潔白な方途で、老僧は仏祖 (Phật Tổ) の為他と博愛の精神について師に説いて聴かせた。その後で

塵世の腐った苦厄から離れ脱し、衆生の済渡のために修行にはげむよう勧めた。

話が終るや、前方の街頭に、巨大な白玉片で造られた彫刻のような純白の高くそびえたつ一座の高殿が出現したのを見た。

高殿の前に到ると、老僧は師に次のように告げた。

「おまえは、この外側で少し待ってから、この屋内にちょっと入ってみなさい」

師は一人立たずんで待った。5分が過ぎ、10分が過ぎ、30分が過ぎた。しかし、依然として老僧はもどらなかった。師は心がせいて門をたたいて叫んだ。

「老師、！」

門はあい変わらず一言も発することなく閉ざされており、何の応答もなかった。

師は、さらに2・3回門をたたいたが、ただ師の声がするだけでたたき度ごとに一層高く響き、高殿の静寂が増したようであった。気がせいて、師は高殿の周囲を巡って、どこかに入る方途がないかと見て回った。そして高殿には互いに似たような八つの門があり、どの門も一言も発することなく閉ざされていることが解った。それぞれの門を、師は一回ずつたたいて回った。しかし、依然として限りない静寂にすべてが覆われていた。師は心が慌ただしくおろそかになり、もどる径路をさがすことにした。しかし、いま師は、はるかな地平線にまで到る白い道がそれぞれの門の前から出でていることを新たに知った。八つの門はみな相い似ており、八つの道はどれ一つとして何の相違もなく、八つの天の方へと通じている。師はどの道かを選ぶべきことを識った。師は心が定まらずに憂え苦しんだ。

この焦慮不安の時にあって、師ははるかかなたに灯光の影がきらめくのを見て、師は心の中で密かに次のように思った。『あの光のある所には必ずや家がある。ここがどこかを尋ね、帰り道を教えてくれるよう頼もう』。

ここで、師は灯光のある方向へと通じる道を行こうとした。はたして、ここにも一軒の大き

な高殿があり、門もまた閉まっていた。師は勇気をふるい起こして門をたたいて尋ねた。

「家の中に、どなたかいらっしゃいませんか」

何の音もしない。師は続けてさらに何回かたたいてみた。依然として、何の音もしない。師はやたらに強く押そうとすると、自然に門が開いて、髪を頭の上で三つに結んでひるがえし、かわいらしいふっくらとした、頬の紅い小童が現れ出た。その小童が門から歩み出ると、門はまた徐々に閉まってしまった。小童は師の顔をまっすぐに指して、次のように言った。

「あなたは、タック (Tắc) さんですか。」

師は、この小童が自分の名前をどうして知っていたのかが解らずに、びっくりした。

「えっ、坊やはまた何で知ってたの。」

小童は、からかうように微笑<sup>ほほえ</sup>んで

「全くとりつくろっちゃって。知らないわけがないだろ。この家の中で、老師があなたを待っているよ。」

師はいっそうびっくりした。

「老師って誰なんだい。教えてくれよ。」

「すぐに解るさ。行こうよ。」

言い終るや、小童は踵を返して、家に入って行った。家の中に歩み入る前に、小童はふり返って師に告げた。

「僕についてきてね。」

小童が入って行くのに師も従って、次のような状景を観た。それを見て、師はややおだやかではいられなかった。すなわち、門の中の方に、金毛の猴が臥して、二本の前足はまっすぐに伸ばして下に降ろし、二本の後足は高く立てて、尻を連子の門に入れてこすりつけていた。小童は事もなげに金毛猴の尻に登り、背中に登って、家の基台に歩み降りる前に、猛獣の前足の上で立ちどまった。

師の疑い迷<sup>ほほえ</sup>って、あえて歩みを進めないのを見て、小童は微笑<sup>ほほえ</sup>んでうながした。

「何か驚くようなことでもあったの。こいつは、どこも咬みつきゃしないよ。およそ、僕のようについてくれば、こわがることなく何もないよ。」

小童に激励されて、師は勇気をふるい起こして、おそるおそるその霊物の尻の上に歩み上り、そいつの背中に登り降り、肩にまで歩み降り、遠くへ大きく跳躍した。

小童は師を横眼でちらっと見て、頭を揺すって微笑むようにして言った。

「あなたは、胆ったまが小さいんだねえ、タックさんよ。」

師は、小童が自分を連れて行きたいことが分かったが、眼をあげて周囲を見回すことを知らないかのようなふりをした。

師が通りすぎるや、門は金毛猴を後ろに、また自動的に閉まった。師と小童は、広く、平坦な回廊の中にいた。長い回廊にそって、五つの大きな部屋があって、部屋ごとに一つの扉がついているが、どの扉も厳重に閉ざされていた。回廊は広く長く、出入りの門はみな閉じており、灯燭は全くなかったが、あい変らず清浄で、柔和な光芒が輝いていた。小童は、師がここに立ちどまって、ぼんやりとして（周囲を）観ている様子を見て、師をせきたてて、最後の部屋の扉のところまで（師の）手を引いて導いて行った。

「ここでお待ち下さい。どんな時でも叫んで下されば、私が喜んでまいります。」

言い終るや、彼が進み入ろうとすると、扉は彼のために開き、歩み入ると、またすぐに閉ってしまった。

師はまったく一人で長く待っていたので、足が疲れてしまったが、いまだに小童はもどって来なかった。師は待ち続けることに勉めて耐えたが、もしこの回廊の中で師一人だけではなく、金毛猴がいなければ、勉めて耐えることは想いも及ばなかったであろう。また、もしこの動物が発作でもおこしたなら、どんなことになったであろう。師は心が落ちつかずせわしく扉をたたいた。

「手を伸ばして開けてくれ。」

扉が開き、師が入った。小童が眼を見張って、次のように言った。

「あなたはなにをしようというんですか、乱

暴な。」

師の品格ある様子を一瞥して、彼はすぐに語調を和げた。

「あゝ、あなたは全毛猴に驚いたのですね。

あなたは、ずいぶんと胆が小さいのですね。

ここにいて、老師をお待ち下さい。」

そう言い終るや師が応えるに及ぶ間もなく、小童はまさに今入ってきたのとは対面する新しい扉の方に出て行った。部屋の中で、また一人っきりになって、師は周囲をながめて楽しむことに意を注ぐこととした。ここは長さ20メートル、幅10メートル、四面の壁も家屋の基床と同じく、実に美しく光り、滑かで平らな玉石の塊を連ねて造られた部屋であった。部屋の中央には、大きな日の字形の机が一卓と各々の辺には三脚づつ椅子が並べられていた。机の前のところはさらにまた一脚の椅子が並べてあり、他の六脚の椅子と同じようでもあったが、一寸と大きく高いものであった。椅子と同じように机も、いまだかつて見たこともないような新奇な様態のもので、机の脚や椅子の脚も、また背もたれも、その表面は五色紋の玉石によって造られており、肘掛けはみな黒い藤葛で造られており、極めて文雅に巻いてあった。師は飽きることなく眺めていた。

師は久しく待った。師は小童を呼びたかったが、彼にまた問いただされるのが恐かった。師が待望するや、扉が徐々に開き、奥深い廊下の前に出た。廊下の端から、青い衣をきた老師のかすかな影が、こちらに来た。老師はとても背が高く、あごひげと髪毛がまっ白で青い色の衣服を着、飄々としてゆったりと厚德の人物のようで、頭には青い帽子もかぶっていた。まさに威厳に充ち、威儀を正した様子であった。老師が部屋に歩み入ると、扉はまた徐々に閉まった。師は手を組んで拝んだ。老師は親密で大変かわいがるような、慈しむような眼で、師を頭から足まで透すように見た。よろこびの感情が突然に心の中に充満し、師は老師の極めてすぐれた美しい態度に酔いしれ、この老師は、服装が違っているだけで、いつの時期であったか中国人

の薬店の中で合った和尚さんととてもよく似ていると思った。老師は中央の大きな椅子にまっすぐに行き、ゆったりと思いのままに、腰を下し、手を肘掛けにのせ、頭をやや後ろにもたせて、実に威厳あるように見えたが、慈しみ賢き様子をそこなうようなことはなかった。

師が酔いしれてしまったようになりながら、師は老師の服装の細々とした点や行為や態度や顔の表情を注視していた。するとその時、老師が声を発した。

「まあ、座りなさい。」

師は命(令)に従って従順に最も近い椅子に腰を下した。しかし、老師は自分の右側の近くにある前列の椅子を指して言った。

「こちらの椅子におかけなさい。」

最初、老師は、師の家庭や生母のこと、また、二兄三兄四妹、さらには家中の人達のすべての事までも、師に聴いた。ただ、師の逝去してしまった生父については、老師は聴かなかった。師は、どうしてこんなに師の家庭のことをよく知っているのか、奇妙な感じがした。

老師はまた師の兄弟たち一人一々の良い性質や悪い行いをもよく知り尽していた。老師は、師に道徳を完全に保ち、身を修める道につくよう教え導いた後で、師が教えの道に入るよう希望した。

師は謹んで静かに座って、老師の教え導いてくれることばに心から耳を傾けていた。老師は意を遂げた様子で教えの顔の上に鮮かな笑を浮かべ、小童を呼んだ。

「食物を持ってきなさい。」

老師の声が終るや、部屋の中に音が鳴り響いて扉が開いた。大きな銀のお皿を持って小童が入ってくると、師の面前においた。そのお皿には、とてもよい香のする湯気があがっており、熱い料理が溢れんばかりに盛りつけられていた。老師がうながした。

「さあ、お食べなさい。」

師はお皿の料理をめでた。これは澱粉で作った円形の料理であった。どれもが二色で、半分が赤く半分が白く、笠の形に重ねられていた。

師は手を伸して、お皿の一番上の料理を取って、箸で口にはこんだ。食べると、とてもおいしかった。長い道を歩き、おなかがすいていたこともあったのだろう。二番目の料理には三皿あった。師はさらにもう一皿取って食べ、ようやく飢えが充された気がした。もっと食べようか、もうやめようかとちょうど迷っていると、老師がその気持ちを分っているかのように、さらに促した。

「もっと、お食べ。」

師は老師のすすめに従い、三番目の料理に手をつけ、大かたを食べ終ると、おなかがいっぱい、食べ過ぎてもうそれ以上食べれないほどであった。それでもさらに、お菓子の外側の二つに手を出したものの、テーブルに投げだした。

師が飽食したことを知って、老師は水を持って来るように言った。小童が黄金でできた大きな茶碗の口もとまで水を充して持ってきた。

たくさん食べて、倦んだ。二皿半を食べつくしたので、師は口の中が喝えた感じがしていた。師はごくごく飲んで、清浄な碗の水を一気に飲みほし、おなかの中まですずしく快くなった。

師が食べ終るのを待って、老師はかすかに口ずさむようにゆっくりと言った。

「今日は二皿半の料理を食べ、一杯の水を飲んだ。次回は、今後あなたが教えを行っていく人生に入っていくことについて、意見が一致するだろう。」

老師はここまで言うと、師がこと細かに問う時間を欲していないように、すぐに小童に命令を伝えた。

「お帰りだぞ。」

師は手を組んで老師を敬って拝し、小童の後に続いて部屋を出た。突然、金毛猴のことを想い出し、師は再び部屋にもどって、老師にこの動物をくださるようにと求めた。老子はうなずいて告げた。

「分った。おまえはまっすぐに帰りなさい。

やつはその後をおまえといっしょに走って行

くだろう。」

身を翻し、金毛猴の所へ行くと、小童は前足を登り、背中に上って、すでにやつ尻の上に立っていた。すると門も小童が外へ歩み出るために開いた。小童が出ると門もまた閉じた。金毛猴は善良な様子を表していた。師が金毛猴の背に登り、尻に上ると門はすぐに開いた。しかし、小童の姿はいづこにか消え失せてしまっていた。師はどの道を帰ったらよいか分らず、師に帰路を教えてくれる小童がいなくなってしまったので、心配しながら周囲を見た。師は大きく叫んだ。

「おい、坊や。」

応答する声はなかった。師はさらに三度続けて叫んでみた。すると、風がおこり揺れ動いて葉がざわめき眼前の灯籠が細々に砕れて、小童が厳しく責め叱りながら跳び出てきた。

「あなたは、そんなに大きな声を出して、何だというんですか。」

師は弁解した。

「坊やが見えなかったんで、（坊やが）どこかに行ってしまったと想い、坊やを呼びもどさねばならなかったんじゃないか。」

「分った、あなたが迷ったことは分ってるよ。でも何をいまさら迷うことを怕れているんです。現在あなたがここにいる、僕がここにいるではないですか」

師は、両手にそれぞれ花たばを一つずつ持って、首にそえている小童を見た。さらに両手で二つのたばを持ち、高く揚げ、いくばくかを師のために捧げていた。

小童に仏心を起こすことなく師は二つの花たばを持っているために風が騒いでも耳に入らずに聴こえない状態になっている小童のために、ただうつむいて、金毛猴から地面に降りた。小童は心から喜んで、思わず笑った。

「分ったよ。僕についていだよ。」

二人は一目散に走った。その時、眼の前に八角形をした高殿が出現した。小童は師を一つの門につれて行った。すでに足もとには二つの足跡が刻まれていた。

「ここがタックさん、あなたが来た門の所の足跡ですよ、見えますか。」

小童の師に告げる口調はとても親切なものにかわっていた。

「これからは、どこに行っても注意して下さいね。」

小童の手が指す方を詳細に見ると、師はそこに自分の二つの足跡が歴然と刻銘されているのが分った。師はまだ何も応えていなかったが、小童は続けた。

「ここからは道を知っているでしょ。旧い道に従ってまっすぐに行けば、帰れるよ。」

「坊やは過去にもどれて嬉しいか。」

「いまはまだできないよ。でも今後老師は僕があなたと地上に降ることを許してくれるだろうよ。分った、あなたは帰っても、家に希望がないんだね。」

突然、自分が長い間遊びに行っていたことが分った。家ではずいぶんと持っていたことだろう。師は小童に別れのことばをいくばくか伝えた。小童は道に沿って走って帰っていった。師は帰ることに最大の努力を払い、全速力で走ったので、思わずある土くれにつまずいて一つの囲みに転倒してしまった。

師は自分に腹を立てて目覚めると、はっきりとは分らぬが、耳もとで大声で泣いている声が聞こえ、目を見開いてみると、周囲には髪の毛をなでたり、手を取り、足をさすって師の名を繰り返して繰り返して称えている人々がごたごたと往来する様子が突然目に入ってきた。

師は努めて起き上がり座ろうとした。ぼんやりとさ迷っている時のことを、師は家の人に尋ねた。

「私の犬はどこだ。」

師は、奇妙な夢のなかで極めて勝れた老師に乞うた金毛猴のことを思い出した。

## (2) 早い時期からの革命精神の萌生え

師は1890年に生まれたが、当時はフランス植民地主義者がヴェトナム全土の至る所で支配の基礎を確立していた時期であった。髪の色が異なり、膚の色の違った外国の侵略軍の圧迫と搾取

の下で苦痛に呻吟する民衆や、不公正溢れる社会の中で亡国の風景を見ながら大きくなった。

主権を喪失した国の有り様を前にして、人々は奴隷のように生きていた。師は早くに覚醒した。幼いながらも、自由・独立・幸福な生活権を取りもどすために、同胞が一丸となって桎梏を打ち破るべく決起するにはどうしたらいいのか、師は夜ごと不眠で思いをめぐらしていた。1950年になって、日露戦争が勃発し、その結果として日本が輝ける勝利を手にしたことが、当時の時期にあって闘争意識を持っていた幾許かのヴェトナム人民に対してと同じく、師をも大いに激励した。

1906年、師はドン・ズゥ運動 (phong trào Đông-du, 東遊運動) に参加し始めた。この運動は、ファン・ボイ・チャウ (Phan-bội-Châu, 潘珮珠) とファン・チュー・チン (Phan-chu-Trinh, 潘周禎) の二人の練達の革命家が、まさに人を派して異なる地方に宣伝・激励をする運動であった<sup>四</sup>。この年師は17歳になり、シャスルー・ローパァ (Chasseloup Laubat) 校の第2学年であった。この当時、サイゴンにおけるドン・ズゥ運動は、ズッオン・カック・ニン (Dương-khắc-Ninh, 楊克寧) とギルバート・チウ (Gilbert Chiêu) の二人によっており、二人は三つのグループが出洋する道を誤たぬように指導した。第4のグループに師の名はあった。ちょうど、雲気が盛んで興奮した心に充ち満ちていた年少の時期にあって、師は遙かなたに美しき夢の数々を思い描いていた。しかし、第4のグループには、前の三つのグループのような幸運はなかった。秘密裏に、黒幕が取調べられてしまった。サイゴンにあったドン・ズゥ運動の事務所でもあり、ニン氏やチウ氏の常々往来する場所でもあったミン・タン工芸所 (sở Minh-tân công-nghệ) がフランスのスパイによって捜査された。ニン氏が冷静かつすばやく行動し、時に及んで資料の一切を破り壊すことを忘れなかったのも、あらいざらい露見させられるようになって、誰一人逮捕されるには至らなかった。このように、フランスのスパイは依然として注

意を怠らずに、時々尾行をし、各指導的な人物のことを聴いて回った。まさに師も彼らスパイにマークされていた。そのため、この年師は勉学にかこつけてタイニン省の故郷にもどり、暫くの間、スパイのひそかに窺う眼を回避していた。

師は、この年ドン・ズゥ運動に従って出洋することができなかった。このことは、あるいはこの後でより一層崇高な任務に付けるため師を保持しておきたいという至尊の聖意であったのかもしれない。

## II 壮年期

年が長ずるにつれ、革命的精神は一層高揚したが、同時に師の教えの道を探求することを焦り心配する気持ちは日に日に募っていった。

師は20歳になって、仏領印度支那政庁商政局の書記となり、すでに21歳の時には、生母の命に遵って家庭を作っていた。しかし、焦慮不安もなく、理想もなく生きて。同胞の苦痛や、江山の変遷といった天下のすべてのことを顧ずに、美しき妻と聡明な子女との楽みを手にするためだけに、月々の給与を得ることを知るにすぎなかった同業の多数の者のような生活は師にはできなかった。

公務員としての生活は、師の生活に何の影響も与えなかったが、愛すべき家庭も、師を束縛することはできなかったし、師が理想への道を歩むことを阻止することはできなかった。

ドン・ズゥの企てが未完にして潰えた後、師は一時期故郷にもどり、闘争の現場に再び身を投じた。師は秘密裏に活動し、『公論』(Công Luận)<sup>コン・ルウアン</sup>、『ラ・クロシェ・フェレー』(La Cloche fêlée)、『ラ・ヴォワ・リーブル』(La voix libre)<sup>ルック・ティン・タン・ヴァン</sup>、『六省新聞』(Lục-tỉnh Tân-văn)、『農古明談』(Nông-cổ Minh-đàm) 等々のような多くの新聞に寄稿した。師は明らかに多くの人々が未だ覚醒せずに愚昧であった時期、すなわち、民族の最も困難な時期にあって闘った。

師は一生他人を愛する心に富んでいた。特に、墮落した者や一人事の者を憐んだ。この時

期にあって、師はとある極めて意義深い行為をなした。それというのは、まさに商政局の公務員をしていて、金銭は毛ほども余分に豊かではないのだが、師はあえて借債をしてまでも、青楼にいる一団の子女が恥辱から脱れ、善良なる生活を取りもどし、家庭的な幸福を享受することができるように、一団の子女を青楼から離れ出させて、解放した。

当時の師の闘争活動は民族国家の幸福をめざしたものであり、周囲の孤り身の者を救援するために毎日善いことをなした。しかし、さらにより重く大きな焦慮と不安の気持ちがあった。それは、腐り苦しんでいる全人類を解脱させるための教えを尋ねることであった。師はキリスト教の家庭に生れ出でたものの、イエス(Giêsu)の博愛の心に対する救世の教え(đạo cứu-thê)は未だに師の心の信心を占居することはなかった。師は、仏道が人々に慈悲や喜捨を勧め告げており、道教が真に存在する本性を生養することによって人間の基礎を構築しようとしており、孔子の教えが人々を中庸の道に導こうとしている教えであって、そのどれにも優れた点があり、少なからず人類が光明の道を歩む際の一助となるものと、認識もし判断する考えも持っていた。このため、師は気をもんで心配し、日夜思索にふけり、現在世間にある、四つの大いなる教えを総合し、それによって、東西両文明の間を創造したいと望んだ。この事は空想ではない。というのは、各宗派の祖師はことごとくすべて、共通する一点の思想、すなわち、善と美を求める傾向がある。それゆえこれら四つの思想を合一することは極めて可能であった。

この目的を達成するために、師は数人の親友と共に、四つの教えの教理の比較・研究をした。一つの共通な意見が提出された。それは、結局のところ一つのことを互いに違った方便を用いているにすぎない、ということであった。そして一つの共通の抱負が発表された。すなわち、四つの教えのすべての結晶は、実際に行われている方便と相互の信仰に関して全く唯一の大いなる教えとなった。

しかし、その結晶を実現化するためにはどのような行動をとったらよいのか。

実際には塵世の人間の力量を遙かに越える困難な事業であった。

そんな時、フランスにおける師の友人の一人である、ボネ大尉(Dại-Úy Bonnet)が到来した。大尉は、各降神に混ざって各神霊と感通できる立場にある命運を持った霊媒の一人であった。大尉は、師の小集団の研究にまで大変な注意をした。しかしまた、大尉には各数えの実際に行われている方便を総合することが可能であるという意識は浮かばなかった。大尉は教えを指し導く各種の神霊に懇求することを勧めた。そして、ほぼ似かよったグループ組織されえた。師と師の各友人にとって、この幽玄で微な困難な問題を理解するために秘密の門を開く錠と鍵は、神霊の以下の如き勧告の言詞であった。

「信仰は良心より発源する。互いに異った良心はそれぞれの人間の精神状態に依っている。それは個性を持たず、また上帝のところにおいては生を離れ出ているために、何時といえども消滅させられることは少しもない。それゆえ、信仰の自由はありとあらゆるすべての人間によって尊重されうるものの、真・善・美といった精神の和合は必須の任務の一つであらねばならない。」

### III 悟道時代

#### (1) カオダイ教の創立

1920—1926年の時期、師はカオ・フウィン・ク( Cao-huỳnh-Cư, 高黄居), カオ・フウィン・ズィウ(Cao-huỳnh-Diêu, 高黄姚), カオ・ホアイ・サン(Cao-hoài-Sang, 高懷槍), グウエン・チュン・ハァウ(Nguyễn-trung-Hậu, 阮忠厚), チュオン・フウ・ドゥック(Trương-hữu-Dức, 張有徳), チャン・ズイ・ギィア(Trần-duy-Nghĩa, 陳惟義), チュオン・ヴァン・チャン(Trương-văn-Tràng, 張文長)等々の各氏と共に、一つのグループを創り、ブルデュ方式(đường Bourdais)によって、とある家で三本足の板の助けをかりて霊界と通感する方法<sup>20</sup>を探り続けていた。仙

ティエン (Tiên), 聖(Thánh), 神(Thần), 仏(Phật) といった各位の中で、降霊した機会に各出席者が幾度も懇求するにもかかわらず、その姓名を明かさな一位の霊があった。降霊の機会の度ごとに、この霊はア・ア・ア (A, Ā, Â) とだけ名のつた。この霊の広博なる神通の智はありとあらゆるすべての人を敬服させた。試すためにどんな困難な問題を出しても、ア・ア・アの霊はすべてを簡単に、しかも詞と意志のすべてがとても素晴らしい詩句で、理に合って回答した。

1925年12月24日の夜になって、ア・ア・アの霊は、自分が至尊であることを初めて明かし、カオダイの名号の下、ヴェトナムの領土の上に真理を表し揚げんことを告げた。

この時から、師のグループの人達はすべてカオダイ仙翁 (Cao-Đài Tiên-ông) の信徒となった。久しからずして、商政局公務員であるフランス人ラタピィ (Latapie) もこのグループに加入した。ラタピィは、かくしてカオダイ教の最初のヨーロッパ人の信徒となった。

1928年1月28日、至尊の命により、師はクゥ氏と共に、前植民地議会議員であり、またチョ・ロン (Chợ-lớn) に於ける諮問議会<sup>④</sup>の前メンバーであったレ・ヴァン・チュン (Lê-văn-Trung, 黎文忠) 閣下を尋ねて、一つのグループが組織される機会を求めた。この後、レ・ヴァン・チュン先生はカオダイの信徒となった。

さほど経ずして、師はチュン氏、クゥ氏、サン氏、ハァウ氏と共に至尊の命に従って、<sup>ティエン・</sup>天眼 (Thiên-Nhơn) の来歴を尋ねるために、またサイゴンにあった二つのグループの統合を実現するために、ゴ・ヴァン・チウ (Ngô-văn-Chiêu, 吳文昭) 翁父の家まで行った。チウ翁父のグループは殷勤に迎え入れた後、天眼の供奉を認め、師や各友人にもその供奉の様子を觀せてくれた。まさに、この日至尊の命に従って二つのグループの結合がなされた。ゴ・ヴァン・チウ翁父は、カオダイ信徒のそれぞれすべての長兄とみなされた。というのは、翁はカオダイ教や天眼侍奉の格式について至尊の伝授のことばを得た第一の人物だったからである。

当時、至尊の信徒の数は12人であった。すなわち、師と共に、チウ氏、キィ (kỷ) 氏、チュン氏、ホァイ氏、サイン (Sanh) 氏、バァン (Bản) 氏、サン氏、クゥイ (Quý) 氏、ザァン (Giảng) 氏、ハァウ氏、ドック氏、クゥ氏の人々<sup>⑤</sup>であった。乙亥の年正月初一日 (1926年2月)、至尊はある期間、求められて降霊した。その際、すべての人の努力する心を称讃した後、至尊は記念に一篇の詩<sup>⑥</sup>を留めた。

招期中度引懷生 (期を招き、中を度し、懷生を行く。)

本道開創貴構成 (本道開創して、貴講をなす。)

厚德塞居天地景 (厚德は天地の景に塞居す。)

還明敏到守台条 (明敏還り到りて、台条を守らん。)

丙寅 (1926) 年の8月22日、ガリエニ 通り (đườngGalliéni) 245番地のヴォ・ヴァン・クゥオン (Võ-văn-Cường, 武文綱) 氏の家で、教団が組織されるための荘厳な式典が催された。カオダイ信徒名簿がつくり上げられ、全部で145名の署名を記した、フランス政府へ稟告するための正式な宣言も起草された。署名した人数の中には、あらゆる部門の公務員がおり、また商人、工業家、文筆家など、各種の人々が入っていた。

## (2) 天封護法

1927年になって、チョ・ロンの総督方向の通りにあるレ・ヴァン・チュン教宗閣下の家で、ある夜空前絶後の荘厳な会合が設けられた。この夜、全部で19名の人々がいた。その中には師や教宗レ・ヴァン・チュン閣下やカオ・トゥオン・ファム (Cao-Thượng-Phàm, 高尚品) 氏やチウ翁父等々がいた。

至尊が降霊してチウ翁父を追放した後、カオ・トゥオン・ファム氏に乗り移り天眼の神台に歩み上り、神龕に香をたいた。その時、師はまん中ではなく、後ろに立っていた。至尊は速やかにとり行うや一言も話さなかったが、幽玄で微妙なる仕方で、師は次のことを感通し諒解した。すなわち、師が立っている場所は、至尊の神台と対面する神台の上に位置している。師は今後、大礼が行われる度毎に護法の場所に歩



み上って立たねばならない。

このことは、至尊が師に協天台<sup>ヒエツツ・タイエン・ダイ</sup>を掌管する職を授け、その直接の権限の下に上生<sup>トウオン・フナム</sup> (Thượng-Sanh) と上品<sup>トウオン・フナム</sup> (Thượng Phẩm) がおかれたのである。

師は、教えの奥深く幽玄にして微妙なる点を掌握している人であり、實際上の一生を常々掌握し、職位 (chức sắc) 諸位の天封を処理し、全信徒諸位を教えの下に規範から離れ出ないように保護し、聖位<sup>タイン・ヴィ</sup> (thánh-vị) に入れるように信徒諸位の人生を支え扶け起こしているのである。

1933年、教宗レ・ヴァン・チュン閣下が登仙され、1935年11月8日になって喪があけた。陽暦の11月8・9・10日にタイニン省トア・タイン (Tòa Thánh, 聖座(聖堂)<sup>トア・タイン</sup>) において、偉大なる礼典が挙行され、各地より信徒が出席し数万となった。

3日間の礼会の後、11・12日に人<sup>ニョン・サイン</sup>生 (Nhân-sanh) と聖<sup>ホイ・タイン</sup>会 (Hội Thánh) のすべてが集合し大会議が開催され、教宗閣下が登仙してしまった後の代理人の選挙問題が解決された。

すべての人生会と聖会の人々は、頭師<sup>ダウ・スツ</sup> (Đầu-Sư) が正位につく日まで、教えの政治的な統一権は師が執るべきであると、奥深い信心を完全に提示しようとするかのようにこぞって喊声をあげた。師は協天台を掌管する職に天から封ぜられ、いままた、師はすべての九重台を掌管する職を加え、教えの道に至尊の子女たちを導くためにも教団を保ち、また、至尊の代表でもあった。

#### IV 伝道過程での諸障碍

師とカオダイ教の各職位は、いかなる時でも、天の教え (Đạo Trời) を伝播するために心を尽し、労苦をいとわずに困難に立ち向かい働かねばならない。というのは、みんなが次のような意識を持っているからである。すなわち、カオダイ教に入信するのがどれだけ遅れたかは、人生の損害がその日数分だけ増えることにほかならない。しかし、わずかの良からざる人々は、名利の残りがすを天に帰せてばかりいて、

生活権に依拠し、誣告を謀って秘かに教えにある人を損い、カオダイの聖<sup>ホイ・タイン</sup>会が散り々に砕けざるを得ぬように捏造して伝え、師は一時期流亡せねばならなかった。

彼らは、法<sup>フアツツ・チャイン・チュエン</sup>正<sup>タン・ルウアツト</sup>伝<sup>ダオ・ギイ</sup>、新<sup>デイン</sup>律<sup>トア・ギム</sup>、道<sup>ホイ・タイン</sup>議<sup>ホイ・ニヤン・サイン</sup>定<sup>トア・ギム</sup>のようなカオダイ教の戒律の註解や改変をし、聖<sup>ホイ・タイン</sup>会<sup>ホイ・ニヤン・サイン</sup>、人<sup>トア・ギム</sup>生<sup>トア・ギム</sup>会<sup>トア・ギム</sup>、監<sup>クウウ・グイエン</sup>院<sup>クウウ・グイエン</sup> (Tòa Giám), 九<sup>クウウ・グイエン</sup>院<sup>クウウ・グイエン</sup> (Cửu-Viện) や、その他の上<sup>ハ・ギイ・グイエン</sup>議<sup>ハ・ギイ・グイエン</sup>院<sup>ハ・ギイ・グイエン</sup> (Thượng-Nghị-Viện), 下<sup>トア・フン</sup>議<sup>トア・フン</sup>院<sup>トア・フン</sup> (Hạ-Nghị-Viện), 九<sup>クウウ・グイエン</sup>部<sup>クウウ・グイエン</sup>台<sup>クウウ・グイエン</sup>觀<sup>クウウ・グイエン</sup> (Cửu-bộ Đài Quan), 裁判所<sup>トア・ボオ</sup> (Tòa-Án), 省<sup>トア・ボオ</sup>郷<sup>トア・ボオ</sup>署<sup>トア・ボオ</sup> (Tòa-Bồ) …等々をみて、カオダイ教には、王を謀って覇をとえようとする陰謀があり、カオダイ教は大きな一国の中に小さな国を立て、立憲君主制をその政策路線としているとの誣告がなされた。

庚辰の年(1940)7月23日、特務兵が聖<sup>タイン・デア</sup>地の周囲に入り、文書を捜査し、報恩寺の門を閉ざした。

庚辰の年(1940)11月8日、特務兵は5台の大型自動車に乗って、聖<sup>トア・タイン</sup>堂 (Tòa Thánh) に入り各職位や教友を逮捕し、タイニンに護送した。

辛巳の年(1941)5月25日、フランス政府は、聖<sup>トア・タイン</sup>堂<sup>トア・タイン</sup>の造営禁止令を出す。

辛巳の年(1941)6月4日、ちょうど朝8時、密偵が聖<sup>トア・タイン</sup>堂<sup>トア・タイン</sup>に入り、護法を逮捕した。

辛巳の年(1941)7月9日、郡主と若干の烏合の衆と兵士が聖<sup>トア・タイン</sup>堂<sup>トア・タイン</sup>の周囲に入り、カオダイの各道友 (đạo hữu) の人頭税の証明書を検査し、タイニンの聖<sup>トア・タイン</sup>堂<sup>トア・タイン</sup>の周囲の住いに帰ることのないよう各省の人々に禁止し、各省出身者はすべて自分の在所に帰るよう追放令が出された。

辛巳の年(1941)7月11日、特務兵が聖<sup>トア・タイン</sup>堂<sup>トア・タイン</sup>に入り、天<sup>タイニン・フオン</sup>封<sup>チュウツク・サツク</sup>の職<sup>タイニン・フオン</sup>位<sup>チュウツク・サツク</sup>4人を逮捕し、さらに、サイゴンにおいては大<sup>グイ・タイニン・フオン</sup>天<sup>グイ・タイニン・フオン</sup>封<sup>グイ・タイニン・フオン</sup> (Đại Thiên Phong) が一人逮捕された。

辛巳の年(1941)8月7日、日本ファシストの軍隊が聖<sup>トア・タイン</sup>堂<sup>トア・タイン</sup>を占領した。辛巳の年(1941)10月25日、特務兵が聖<sup>トア・タイン</sup>堂<sup>トア・タイン</sup>に入り、さらに三人の職<sup>チュウツク・サツク</sup>位<sup>グイ・タイニン・フオン</sup>を逮捕した。

壬午の年(1942)3月7日、フランスの軍隊が公立学校や書庫を突いた。壬午の年(1942)3月

20日、フランス軍と郡主は、公立のすべての事務所を攻め、聖<sup>トア・タイン</sup>堂の諸位を不意打ちにして占領した。

敵軍が聖<sup>トア・タイン</sup>堂にいた各信徒を恐れおののかせていた時、彼らフランス軍は護法を、コンピエーニュ(Compiègne)の船で、他の5人の職<sup>チュック・サック</sup>位と共に、1941年7月27日、マダガスカル(Madagascar)へ送った。

この船の中には、グエン・テ・チュエン(Nguyễn Thê Truyền, 阮世伝)氏、グエン・テ・ソン(Nguyễn Thê Song, 阮世雙)氏、グエン・ヴァン・フェン(Nguyễn-văn-Phiên, 阮文扇)氏らのような多くの革命家も乗っていた。護法も他の職<sup>チュック・サック</sup>位各氏と同じように、マダガスカルに至るや仕事で外出するほかは、1944年11月24日まで、監獄の中に拘留された。

同盟軍が優勢を占め、ドゴール(De Gaulle)陣営がフランスを解放した時、師は初めて釈放され、1946年10月1日にヴェトナムに帰された。

このため、師は5ヶ年2ヶ月と3日の間、各信徒と離れて、別の地で過ごさねばならなかった。

遙か彼方の遠き所で労苦に充ちた日々を過ごすうちに、師は至尊の庇護を得て、過去のすべての災難を癒やすことができた。

一度、自動車で幾十人の囚人といっしょに師も運ばれた時、河を横切る橋を通った。自動車がちょうど橋の高いヶ所を通るやいなや橋は折れ、多くの人々もろとも河に落ちてしまった。それでも、誰も死にもしなければ、負傷さえしなかった。

さらにまた一度、師の乗っていた囚人輸送車が、まさに山道を登りだした時、転倒して高みから落っこちた。さらにもうちょっとのところで、車と人がまったくばらばらに深い淵に投げ出されてしまうところであった。しかし、幸運にも、深い淵の河岸の方から一本の樹の根が、手でつかまれと言わんばかりにちょうど手を伸ばせば届く距離に伸びていた。

全く二度も車で同じ人間が助かるとは、何と

幸運なのだろうか。囚人達は師を指さして次のように称した。「俺たちや死をまぬがれた。みんなこの老人のおかげだ」。彼らはまったく愉快そうに、耳を震わさんばかりの大声で笑った。そしてこの時から、誰もが師に同情するようになった。

1946年も末になって、国にもどった護法は各宗教の消滅を主張する無神論の徒に再び対応せねばならなかった。

フランス人は、イギリス人の踵に接してサイゴンに突入し、ヴェトナムを再占領しようとの陰謀をめぐらせた。カオダイ教の信徒らも祖国を愛する人々と同じく、侵略軍を打つべく棍棒を持って決起した。国家抗戦運動(Phong trào Quốc-Gia kháng-chiến)は高揚した。自らの組織化をせまられていたヴェトミン共産主義者らは、国家抗戦運動の中に沈溺しつつ、国家の各党派と同じように各教派をも徐々に消滅させようという新たな方法を講じた。カオダイ教のどれだけ多くの信徒が迫害され、失踪させられ、血塗られたヴェトミンの手によって殺されたことか。

このように同じ程度の苦しみを忍びながらも、カオダイの各信徒に反抗し、各信徒ら自身を殺す志を持った者と、どうして団結することができるであろうか。

ヴェトミンは、地方にあってカオダイの各信徒を脅すばかりではなく、軍隊によって聖<sup>トア・タイン</sup>堂をも封鎖した。師の威徳によって、カオダイ軍が成立し、聖<sup>トア・タイン</sup>堂を防衛し、野蛮で血にうえた独裁軍を後退させた。それによって安寧した秩序の下で各職<sup>チュック・サック</sup>位がひき続き教えを実践し、各信徒が至尊を侍奉することができたのである。

## V 功 業

師は、至尊によって最初に選ばれた信徒の一人であり、また早くから天より護法に封ぜられ、協天台を掌管し、教宗レ・ヴァン・チュン師と共に創始期の教えを保護していた。

レ・ヴァン・チュン師が登仙した後、師は二つの有形台の両方を掌管し、この塵世を避け

ようとするあらゆる教えの信徒を絶妙に導いた。

師は、極めて神秘的な方法を持った奇想天外な人間の一人である。師の威信と決心に依ってカオダイ教はどんなに多くの困難な障碍にあおうとも、停ることなく発展した。

師の偉大な功業は次の四つを包含している。

- 1) 聖廟建立
- 2) 至尊の訓辭の言に従って、<sup>ホイ・タイン</sup> 聖<sup>ホイ・ニヤン・サイン</sup> 会と人<sup>ニヤン・サイン</sup> 生<sup>ニヤン・サイン</sup> 会を組織した。
- 3) 教えを四方に遍く発展させた。
- 4) 教えの防衛と解放闘争のために、軍隊を創出した。

#### (1) 聖廟建立事業

聖殿は、偉大にして新奇なる性格のため、外国の観光客をも敬服させるような建築工程であった。名誉教宗李太白は、護法ファム・コン・タックを通して、神聖な廟座の建築方法についてと同じように模様についても、詳細かつ間接的に教え導いた。このように偉大で新奇な建築物を誰も想像できなかったであろうし、また極めて微少な資材で普天下の信徒にできばえを示すことが実現できるとは誰も想像できなかったであろう。一つの特長は、神聖で純潔な紛意気をつくり出すために、聖殿建立の時期にすべての工匠と泥工とが、均しく皆貞節を守らねばならなかった点にあった。

最初の基礎は、1933年に設置され、1936年に至って再び起工され、1941年に入って建築が完成をみた。殿宇はいまだ完全に装飾されるには至らず、護法は5年以上の歳月を費し、事業を暫く停止せねばならなかった。1946年、師がもどるや、再び輝かしいまでの内装と修繕が継続された。1947年から聖殿の正門が開かれ、1954年にはすべてが次々に完璧に完成され、乙未の年(1955)1月初めに落成した。

聖殿は長さ145メートル、幅40メートル、協天台の鐘楼の方は高さ36メートル、九重台の方は高さ25メートル、バット・クッアイ・ダイ(Bát-Quái-Đài, 八卦台)の方は高さ30メートル<sup>グム・ザオ・グウ・チ</sup>あり、西方に面している。すべてが三教五枝

(Tam Giáo Ngũ-Chi)の象徴によって作られ極めて美術的にならべ設けられている。

#### (2) 聖<sup>ホイ・タイン</sup> 会と人<sup>ホイ・ニヤン・サイン</sup> 生<sup>ホイ・ニヤン・サイン</sup> 会の組織事業

至尊が発給された「法正伝」に従って、師は<sup>ホイ・ニヤン・サイン</sup> 人<sup>ホイ・ニヤン・サイン</sup> 生<sup>ホイ・ニヤン・サイン</sup> 会と同じように<sup>ホイ・タイン</sup> 聖<sup>ホイ・タイン</sup> 会を組織したが、世間の各教えではいまだ見られないような法則の規矩がある。このため、教えの基礎は堅強で、生活の部分も美しく平和な紛意気の中で安楽に生活することができた。

教え下での全ての条件は、塵世では相互に三つの最高機関、すなわち、九重台、協天台、福善機関のどれかに属さねばならないということである。

##### i. 九重台 (Cửu Trùng Đài)

行政権を持ち、教宗によって掌管され、天の条款(Thiên Điều)に違反しないように教えの道に各信徒を導く。

九重台<sup>チュウツク・サツク</sup>の職<sup>チュウツク・サツク</sup>位は次の順序に従っている。

- 1) ザオ・トン(Giáo Tông, 教宗)……………1位
- 2) チュオン・ファップ(Chư-ông-Pháp, 掌法)……………3位
- 3) ダウ・スウ(Đầu-Sư, 頭師)……………3位
- 4) チャイン・フォイ・スウ(Chánh-phòì Sư, 正配師)……………3位
- 5) フォイ・スウ(Phòì Sư, 配師)……………33位
- 6) ザオ・スウ(Giáo Sư, 教師)……………72位
- 7) ザオ・フウ(Giáo Hữu, 教友)……………3000位
- 8) レエ・サイン(Lễ Sanh, 礼生)……………無限定
- 9) チャイン・チ・スウ(Chánh-trị-sự, 正治事)……………
- 10) フォ・チ・スウ(Phó-trị-sự, 副治事)……………
- 11) トン・スウ(Thông-sự, 通事)……………
- 12) ティン・ドォ(Tín Đổ, 信徒)……………

九重台には次の9院が付随している。ライ・ヴィエン(Lại-viện, 吏院), レエ・ヴィエン(Lễ-viện, 礼院), ホァ・ヴィエン(Hòa-viện, 和院), ホ・ヴィエン(Hộ-viện, 戸院), ルウオン・ヴィエン(Lương-viện, 粮院), ホック・ヴィエン(Học-viện, 学院), ノン・ヴィエン(Nông-viện, 農院), コン・ヴィエン(Công-viện, 工院), イ・ヴィエン(Y-viện, 医院)

ii. 協天台 (Hiệp-Thiên-Đài)

護法によって掌管され、教えを防衛するため  
に立法権を持つ。直属の<sup>トウオン・ファム</sup>上品と<sup>トウオン・サイン</sup>上生の  
各氏がいる。12の調査役に就いている者の上に  
3位が位置する。協天台における各職位<sup>チュック・サック</sup>  
は、次のような順序に従う。

- { トウオン・サイン (ThượngSanh, 上生)
  - { バオ・テェ (Bảo Thê, 保世)
  - { ヒエン・テェ (Hiên Thê, 憲世)
  - { カイ・テェ (Khai Thê, 開世)
  - { ティエップ・テェ (Tiệp-Thê, 接世)
  - { ホ・ファップ (Hộ Pháp, 護法)
  - { バオ・ファップ (Bảo Pháp, 保法)
  - { ヒエン・ファップ (Hiên Pháp, 憲法)
  - { カイ・ファップ (Khai Pháp, 開法)
  - { ティエップ・ファップ (Tiệp Pháp, 接法)
  - { トウオ・ンファム (Thượng-Phẩm, 上品)
  - { バオ・ダオ (Bảo-Đạo, 保道)
  - { ヒエン・ダオ (Hiên Đạo, 憲道)
  - { カイ・ダオ (Khai Đạo, 開道)
  - { ティエップ・ダオ (Tiệp Đạo, 接道)<sup>チュック・サック</sup>
- 協天台の各職位の種類は次の如くである。

- 1) ティエップ・ザン・ダオ・ニョン (Tiệp-Dẫn Đạo-Nhơn, 接引道人)
- 2) チュオン・アン (Chưởng Ân, 掌印)
- 3) カイ・チャン (Cải Trạng, 改状)
- 4) ザム・ダオ (Giám-Đạo, 監道)
- 5) トゥア・スウ (Thừa Sứ, 承使)
- 6) チュエン・チャン (Truyền-Trạng, 伝状)
- 7) スィ・タイ (Sỹ Tài, 士載)
- 8) ルアット・スウ (Luật Sự, 律事)

iii. 福善機関 (Cơ-Quan Phước-Thiện)

老翁・老婆・孤児・寡母・残疾者を、教えの  
外にいる者も教えの内にいる者と同じように世  
話をし、料理をつくることを任務とする。物質  
に関して同様、精神に関しても、完全入道のため  
に出家を願ひ出た<sup>チュック・サック</sup>職位の家庭を扶助する。

福善機関の各<sup>チュック・サック</sup>職位には次のものが含まれる。

- 1) ファット・トゥ (Phật-Tử, 仏子)
- 2) ティエン・トゥ (Tiên-Tử, 仙子)
- 3) タイン・ニョン (Thánh-Nhơn, 聖人)
- 4) ヒエン・ニョン (Hiên-Nhơn, 賢人)
- 5) チョン・ニョン (Chơn-Nhơn, 真人)
- 6) ダオ・ニョン (Đạo Nhơn, 道人)
- 7) チ・ティエン (Chí Thiện, 至善)
- 8) ザオ・ティエン (Giáo-Thiện, 教善)
- 9) ハイ・ティエン (Hành-Thiện, 行善)
- 10) ティン・ティエン (Thính-Thiện, 聴善)
- 11) タン・ザン (Tan Dân, 新民)
- 12) ミン・ドック (Minh-Đức, 明德)

(3) 教えの四方各処への発展

フランス植民地主義者、日本ファシスト、ヴェ  
トナム共產主義者らによって、カオダイ教は  
何度となく破壊され迫害されてきたが、護法の  
英明な決断と智慧によって導かれ、日々拡充し  
てきた。

1926年には、わずかに数十人の信徒がいるに  
すぎなかった。しかし、現在の信徒数は二百万  
人近くになり、カオダイ教は南部ヴェトナムの  
地に膨張しただけではなく、教えは中部ヴェト  
ナム、北部ヴェトナムに広がり、さらにカンボ  
ジア、ラオスにまで及んでいる。少なからざる  
世道が重畳たる大海をも克服し、ヨーロッパや  
アメリカにまで至っている。

カオダイ教は、多くの神学と宗教に関する国  
際会議に代表を送っている。それはガブリエル  
・ゴブロン (Gabriel Gobron) 氏である<sup>四</sup>。氏は、  
バルセロナ (Barcelone) における神学に関する国  
際会議 (1934) に、カオダイ教の第一回目の代表  
であった。第二回目はロンドン (Luân-đôn) にお  
ける宗教に関する国際会議 (1936年) において。  
第三回目はグラスゴウ (Glasgow) における神学  
に関する国際会議 (1933年) において。第四回目  
はパリ (Ba-Lê) における宗教に関する国際会議  
(1933年) においてであった。ヨーロッパの新聞  
の一頁に、カオダイ教について次のように書か  
れた。「カオダイ教は宗教に関する国際会議の  
中で重大な責任を持つことになろう。というの  
は、世間を再び平穏で太平なものとするため

に、各宗教を合一しようという理想をカオダイ教が持っている点に、すべての人々がみな注意しているためです。この理想は、我々が追従すべき目的でもあるのです。」

#### (4) カオダイ軍 (Quân Đội Cao Đài) 組織

カオダイ各信徒は、教えに従って、世間の人としての本分を忘れないでいる。

外国の侵略軍によって蹂躪され、さらには共産主義者の陰謀によって独裁の災厄が降りかかってきて、国が乱れた時期に当って、カオダイの各信徒は、教えの擁護のためと同時に救国のための闘争に立ち上った。

護法の領導の下、系統的で、条理を持った組織である軍隊が創出された。そして何にもまして、この軍の教えは、民族国家のために自ら願ひ出て服務するような教えと、自ら願ひ出て服務するような愛国的精神とが一對をなして、強大な教えの精神となっていた。

このために、この軍隊は民心を得、どこに行っても慕われ感謝され、歓呼によって鼓舞された。

10年に満たざる歳月の中で、カオダイ軍は若干の大隊から三・四十の小隊にまで発展し、グエン・タイン・フォン (Nguyễn Thành Phương, 阮誠芳) 中將の総司令権の下に、兵数三万人たらずで設けられた。このカオダイ軍は、現在共産主義者を殲滅し、外国の侵略軍に抗する闘争事業の中で、小さからざる勢力であった。

### VI. 各信徒のまたヴェトナム人民の 瞻仰の心

護法ファム・コン・タックの功業は、協天台と九重台のすべてを掌管し、カオダイ三期普度 (Cao Đài Tam Kỳ Phổ Độ) の教えの政治的統一権を執ったことが実は偉大なことであった。我々信徒だけが師に信頼を依せているばかりではなく、ヴェトナム民族の全てが師を敬服していた。さらにまた全世界までもがタイニンの聖地に向って瞻仰していた。

大道三期普度 (Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ) は師の統一権の下に置かれ、師の神聖な影響は極め

て広く大きく、日毎に拡充していった。大道三期普度は、東洋のあらゆる辺境を克服し、ヨーロッパのみならず南アメリカや北アメリカにおいても拡がった。

今日、国内にあっては骨肉あい食み、世界は墮落して混乱している。ヴェトナムに於いてと同様に世界において、全ての信徒がみな至尊の命令に従って救世主が出現し、民族を光榮ある駅に導き、人類を穏やかな河岸に導き、真・善・美を目ざして各々が本分を尽すように教え導くことを、師に仰望している。

### VII. 教えの道についての護法ファム・ コン・タックの小史

ファム・コン・タックの立道に当っての功業の概要は既に叙述した。すなわち、カオ・クイン・クウとカオ・ホアイ・サンの両氏と共に護法は、乙丑の年 (1925) から、葉状の物が少しの間教えを創始する道案内を手つだいに至り、靈的な脚の付いた盤を回転しはじめた<sup>㉒</sup>。

1927年、護法ファム・コン・タックは至尊の靈を奉じてキム・ビエン (Kim Biên) (ナム・ヴァン) (Nam Vang)<sup>㉓</sup> に行き教えを開いた。当時この地にはカオダイ教を知る者は誰一人としていなかった。

キム・ビエンにいた時、護法は、後に協天台のティエップ・ダオ (Tiệp Đạo, 接道) に封ぜられたカオ・ドック・チョン (Cao Đức Trọng, 高德仲) 氏の家に暫くの間住んだ。

正に師とカオ・ドック・チョン氏の手によって幽玄にして奥妙な機筆を用いて<sup>㉔</sup>、チャン・クアン・ヴィン (Trần-quang-Vinh, 陳光榮) 氏やフイン・ヴァン・トゥイ (Huỳnh văn Tuy, 黃文綏) 氏等々のような人ばかりではなく、キム・ビエン州城にいる公務員や様々な年令・名前の人物を抄録してあまねく得度させた。この二人は現在<sup>フアイ・トクオン</sup> 尚<sup>フアイ・スワ</sup> 派<sup>フアイ・スワ</sup> の配師<sup>フアイ・スワ</sup> の職を保っている。護法は上述したように積極的に通靈し、言うまでもなく機会があればどの靈ともみな良い結果を得ていたと解されていた。カンボジアの全領土に教えを伝え広めるために、外交聖会が組織

された。当時の聖<sup>ホイ・タイン</sup>会の正式な統計によると、1951年に至って、信徒数は73,164人に増加している。

丙寅の年(1929)から癸酉の年(1933)まで、護法はレ・ヴァン・チュン教宗と協力し、教団を創設した。しかし哀しきかな教宗はこの年(1933)に入って登仙してしまった。1935年11月11・12日に、教宗代替選問題を解決するために聖<sup>ホイ・タイン</sup>会と人<sup>ニヨン・サイン</sup>生のすべてを含めた第一回目の大会が開かれた。

当時頭師<sup>ダウ・スウ</sup>が欠けていたために、正式な頭師が選ばれる日まで、二つの有形台を掌管し教への政治的統一権を執るために、人<sup>ホイ・タイン</sup>生<sup>ニヨン・サイン</sup>会と聖<sup>ホイ・タイン</sup>会とはこぞって護法に完全な信任の意を提示した。

いかなる時でもカオダイ教の各<sup>チュック・サック</sup>職位は義侠の人と共同して、内部からの、あるいは外部からのいかなる障碍にあおうとも、ひたすら天の教えを伝えるよう心を尽して困難にたえた。若干の良からぬ者が権勢に依って、暗に教徒を損なうために陰謀を図り誣告し、うわさを捏造したためカオダイ聖<sup>ホイ・タイン</sup>会は無力となり、護法はある期間追放されねばならなくなった。

当時(フランスに属していた)政府当局は、カオダイ教は位を奪い覇を定め大きな国の中に小さな国を立て、「立憲君主」制の政策路線を取ろうとの陰謀を持っている、と誣告した。

庚辰の年(1940)7月23日、特務兵が聖地周囲に入り、文書を検査し報恩寺の門を閉鎖した。

同年(1940)11月8日、フランスの密偵が五台の大型車で聖<sup>トア・タイン</sup>堂に入り、<sup>チュック・サック</sup>職位と教友五人を逮捕し、タイニンに護送した。

辛巳の年(1941)5月25日、フランス政権は聖<sup>トア・タイン</sup>堂の工人による造営の禁止令を発した。

同年(1941)6月4日朝8時ちょうど、フランスの密偵が聖<sup>トア・タイン</sup>堂に入り護法を捕えた。

同年同月9日。郡主と若干の烏合の衆と兵士が聖<sup>トア・タイン</sup>堂の周囲に入り、カオダイ各教友の人頭税の証明書を捜査し、省出身者は一切在所に戻らねばならず今後さらに聖<sup>トア・タイン</sup>堂周囲の中に住む

ことができない旨の追放令が出された。

同年7月11日、協<sup>ヒエン・ブ・ティエン・ダン</sup>天台<sup>チュック・サック</sup>の二人<sup>カイ・フアツブ</sup>職位、すなわち開<sup>スィ・タイ</sup>法<sup>スィ・タイ</sup>チャン・ズィ・ギア(Trần Duy Nghĩa, 陳維義)と士才<sup>クウ・チュン・ダイ</sup>ド・ダン・ヒエン(Đỗ đẳng, Hiền, 杜登顛)と、九重<sup>チュック・サック</sup>台<sup>フオイ・スウ</sup>の三人の<sup>チュック・サック</sup>職位である配<sup>フオイ・スウ</sup>師<sup>フオイ・スウ</sup>ゴック・チョン・タイン(Ngọc Trọng Thanh, 玉重青)と教師<sup>ゾオ・スウ</sup>タイ・ファン・タイン(Thái-Phân Thanh, 蔡奮清), タイ・ガム・タイン(Thái-Gầm-Thanh, 蔡吟清)がみんなフランスの密偵に捕えられた。

同月27日、フランス政権は、コンピエーニュの船で、護法と上述した人の<sup>チュック・サック</sup>職位を(アフリカ)マダガスカルへ送った。護法と5人の<sup>チュック・サック</sup>職位は、仕事で外出することのできるほかは、1944年11月24日までこの地の監獄にみな拘留された。

1946年になると、同盟軍は優勢となりドゴール陣営がフランスを解放した。護法は釈放され、1946年10月1日にヴェトナムに戻った。計算すると、5年2ヶ月と3日間の長きに渡り遙か遠い所にいたことが分る。5人の<sup>チュック・サック</sup>職位も師と共に流されたが、士才<sup>スィ・タイ</sup>ド・ダン・ヒエンと教師<sup>ゾオ・スウ</sup>タイ・ガム・タインの二人は彼の地で逝去し他の三人は後に戻ることができた。

1946年に、師はカオダイ軍を創設せねばならない時局と情況に置かれた。それは、フランスとヴェトナムの迫害からの自衛のためのものであった。

聖殿建立事業は、他の国々の観光客を敬服させずにはおかぬ偉大で新奇的な建築工程であった。

かかる崇高な事業はひとえに師の建設に当てる手腕と諸々の教友の功勞に依っており、特に建造期中の各泥工の功勞は、神聖で清潔な紛意気を醸し出すために皆が貞節を守ったことにある。

最初の基礎は1933年から始まり、1936年までに新たに建築が起工された。1941年に至ってようやく完成したが、いまだ内装にまでは及ばずにいた時、護法が上述したように流刑されてしまった。

帰国して後、聖殿建造を継続し、1947年には輝ける内装ができ、聖殿の門が開けられ、1954年までかかって全てが完成し、乙未の年（1955）正月初めに落成した。

<sup>ホイ・ティン</sup> 聖 会 と <sup>ホイ・ニヨン・サイン</sup> 人 生 会 は、師によって法正伝に従って創られた組織であり、規矩法則に満ちている。

カオダイ教はフランス植民地主義者の度重なる迫害と破壊を被りながらも、護法の英明な智と決心に依って、あい変ることなく発展し続けた。

1926年、入信した善き信者は、わずか数十人にすぎなかった。しかしながら、現在の信徒数は大約250万人近くに達している<sup>89</sup>。

カオダイ教はただ単にヴェトナム南部の地で膨張したのみならず、さらに、中・北部ヴェトナムに拡がり、カンボジア・ラオスに及び、ヨーロッパやアメリカにまで達している。

カオダイ教は国際宗教会議にも代表を送っている。それはガブリエルゴブロンで、バルセロナにおける神学に関する国際会議（1934）が最初のカオダイ教の代表であり、1936年のロンドンにおける宗教に関する国際会議に出席したのが第2回目。グラスゴーにおける神学に関する国際会議（1938）に出席したのが第3回目、そしてパリにおける宗教に関する国際会議（1939）に出席したのが第四回目であった。

ヨーロッパの新聞はカオダイ教について次のように記している。「カオダイ教は諸々の宗教に関する国際会議の中で偉大な重責を負うことになる。この世が全く穏かで太平であるためには、各宗教を一つに合せるべきとの理想を持っている点でカオダイ教に、すべての人々は注目しているのである。このことは、我々が追求せねばならない普遍的な目的でもある。」

#### （1）護法の流亡の歩み

先に我々は教えの道に関する功業の概要を述べた。かかる功業は誰も否認することはできない。多くの人々は理解し、他の人はさらに感嘆する。

しかし、嘆かわしきかな。我々が目撃した経

験は、時として道理に逆らっていることが多々ある。偉人と称される人は生きているうちに宏大な事業を成すことは少ないが、結局は後代に継承されて留められるだけなのである。成功してすぐに享受できることはまずない。このことは通例のようにすらなっている。

乙未の年（1955）正月初めに聖殿落成式典が挙行された、またその年のうちに、まさに護法の手によって成立し、総司令グエン・ティン・フオン（Nguyễn thành Phương, 阮成芳）将軍によって領導されていたカオダイ軍が、ティン・チュン（Thanh Trùng, 清憲）委員会を設け多くの教友を捕えて拘禁するよう命令を下した。この教友の中には、護法の二人の娘も含まれていた。教えの下にあった別の何人かの少女達も数ヶ月間拘留され、護法らは奥ゆかしさに欠けるといった多くの供述をするよう強制された。また師も護法堂（Hộ Pháp Đường）に軟禁され、周囲には武装軍がおり、守衛の出入りすら認められなかった。このような恥辱を前にして、護法は小状況に眉をひそめながらも何ら動揺することなく、じっと耐えていた。

乙未の年（1955）8月20日から丙申の年（1956）正月5日まで軟禁され、同門の徒が相い食む状況を愁い恥じて、護法はその日の深夜3時に眼を閉じて、ただまっすぐにカンボジアの首都めざして出て行くことに決めた。我々は当時多かった流亡客にまじってキム・ビエンに宿をとった。師はこの都市にファット・マウ（Phật Mẫu, 仏母）を祀る殿をさらに建造することができた。また師は度々シアヌーク太子から上客として優待され、尊師のように敬まわれた。

更に嘆かわしい事は、偉人の一人でありカオダイ教の棟梁であった人物が、余りにも早く至尊に迎えられてしまったということである。己亥の年（1959）4月10日、護法は一時病に臥せった。その後仙人を追っていかれた。師の遺骸は、<sup>デン・ファット・マウ</sup>現在蓮台の中でキム・ビエンにある仏母殿に安置されている。

護法ファム・コン・タックは庚寅の年（1890）5月5日に生まれ、師が登仙した日までを数え

ると、師は享年70歳であった。

登仙する前の己亥の年(1959)5月7日と14日に、師はシアヌーク太子に仏文で親書を送り、「貴国の地で師の本道を稟告させていただきたい、というのは以前からそろそろ塵俗での肉体から脱け出し、神聖なる位にもどらねばならない時が来たのを知っているからである」と記していた。

### 付 記

この護法ファム・コン・タック小史は、その内容から1960年以後、おそらく60年代初期に記されたものと想われる。筆者の不明から十分に意を伝ええぬ箇所も多いと思う。詩の部分については畏友川口健一兄の指導を得た。記して謝意を表したい。

### 註

1. Lịch-sử Quan Phủ Ngô-văn-Chiêu (1878—1932) 1956 Saigon に啓示の内容・情况等が詳しい。
2. 初期の概説については、Contribution A L'Histoire Des Mouvements Politiques De L'Indochine Française, Documents Vol. No. VII, LE CAODAISME (1926—1934) が詳しい。歴史については、ĐÔNG-TÂN, LỊCH SỬ CAO-ĐÀI, ĐẠİ-ĐẠO TAM-KÝ PHỒ-ĐỘ 1926—1937 Quyên Hai, 1972 Saigon が詳しい。
3. Danny J. Whitfield: Historical and Cultural Dictionary of Vietnam, 1976 p. 34.
4. Nguyen van Canh: Vietnam Under Communism, 1975—1982, California. p. 164.
5. Werner Jayne Susan: The Cao Đài: The Politics of A Vietnamese Syncretic Religious Movement. 1976 Cornell University Ph. D.,
6. Victor L. Oliver: Cao Dai Spiritism, a study of Religion in Vietnamese Society, 1976 Leiden.
7. R. B. Smith: An Introduction to Caodaism I, II., Bulletin of the School of Oriental and African Studies, University of London, Vol. XXXIII Part 2, 3 1970.
8. 大岩誠「高臺教」『新亜細亜』3—3~5 東京 1931
9. カオダイ教徒による注解・解説等は幾つかある。一例を掲げる。  
Tiệp Pháp Trường-văn-Tràng: GIÁO-LÝ 1970. TÂY NINH
10. R. B. Smith: op. cit, pp. 347—9.
11. 本稿では、Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ 派の聖典を以って同教の聖典としている。ただし、筆者が同派を正統と認めたために同派の聖典を以って「カオダイ教聖典」としたのではないことを付言しておく。他のカオダイ諸派に聖典と称されるものがほとんどないという史料上の制約による。チュウ・ミン派には次の聖典と言えなくもないものがある。CAO ĐÀI ĐẠI ĐẠO PHÁI PHIÊU MINH; ĐẠI THỪA CHƠN GIÁO, 1950 Saigon.
12. 李教宗とは李太白を指す。カオダイ教では名誉教宗とされている。
13. ヴェトナム語の Nhân (もしくは Nhơn) は人仁という漢字に対応する。本稿では先学に習い「人」の字義を取ったが、孔子の教えを考える時「仁」の字義も可と思う。
14. カオダイ教の協天台は教団の立法機関としての性格を持つ。
15. カオダイ教の九重台は教団の行政機関としての性格を持つ。
16. 二つの有形台とは、協天台と九重台の二つの機関を意味する。
17. カオダイ教の年間祭礼の一つに数えられている。Victor L. Oliver: op. cit. p. 14.
18. 宗懐 守屋美都雄訳注、布目潮風他補訂『荆楚歳時記』平凡社1978, pp. 149—158参照。
19. 日本等に出洋し革命に必要な武器や知識を求めたヴェトナム人の抗仏運動であるドン・ズウ運動の一時期一形態として理解できる。
20. ウィジャヤ板を使った降霊術。
21. Conseil Colonial de Cochinchine や Conseil Supérieur de l'Indochine のこと。
22. 「当時の至尊の信徒の数は12」人としながら13人の名前が掲げられている。本稿では原文のままとした。
23. 詩の中に13人の名が盛り込まれている。下線を付した。ただし、音が同じでも声調は違っている。



24. 200 エーカーに及ぶ聖地を含めトア・ティンと  
いう。本稿では聖<sup>17・ティン</sup>堂と訳した。
25. ガブリエル・ガブロンにはカオダイ教について  
次の代表的著作がある。Gabriel Gobron: HI-  
STORY AND PHILOSOPHY OF CAODAI-  
ISM, Saigon, 1950 同書はフランス語で書かれた  
ものの英訳書である。仏文の原文について著者未  
見。
26. ウィジャヤ降霊術に使用する器具が文字盤の上  
を三つの足のついたハート型の葉状であるため、  
このような記述となったと思われる。
27. カンボジア北東部に位置する。Đào duy Anh :  
Đất Nước Việt Nam Qua Các Đời, Nghiên  
Cứu Địa Lý Học Lịch-Sử Việt Nam, Đông  
Nam Á, Hà Nội, 1965. pp. 160, 183, 185, 200  
を参照。
28. 降霊術によって得たお筆先の意。
29. カオダイ教団の公称であり、1960年代には200  
万～250万とされ、1970年代の解放前には公称250  
万～300万とされた。



護法ファム・コン・タック